



Title	Witkoś(2004)において提案されているthere構文の分析について
Author(s)	加藤, 正治
Citation	大阪大学英米研究. 2018, 42, p. 63-71
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99419">https://hdl.handle.net/11094/99419</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# Witkoś (2004)において提案されている there 構文の分析について

加藤 正治

## 1.

英語の there 構文の there は通例 there 挿入により構造の中に組み入れられる。そこには移動が関与していないにもかかわらず次の Witkoś (2004) からの例 (p.175) にあるように there と関連要素 (associate) は A 連鎖 (A-chain) を形成しているかのような性質を示す。

- (1) a. \*There seems that someone is in the room.  
b. \*There is the man drinking a beer.

- (2) a. \*Someone seems that *t* is here.  
b. \*A beer is the man drinking *t*.

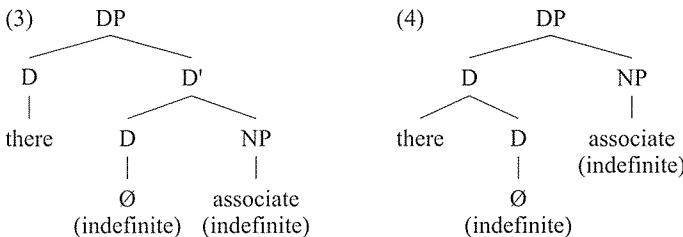
(1 a)においては there と that 節内の関連要素が関連付けられないことを示しており、これは (2 a)において that 節内の要素を主節へ A 移動できないのと同じ性質を示している。(1 b)においては there と関連要素 a beer との間に主語 the man が介在するために両者の関連付けが阻止されていることを示しているが、これは (2 b)において目的語 a beer が主語 the man を越えて A 移動できないのと同じ性質を示している。標準的な there 構文の分析では関連要素を there の位置へ LF 移動することにより there と関連付けて

この性質を説明しているが、Witkoś (2004) は数量詞の作用域に関する問題や先行詞に含まれた削除 (antecedent-contained deletion) に関する問題を指摘してそのような LF 移動は存在しないとしている。そしてその代案として there と関連要素が一つの構成素を形成し、there だけが統語論において A 移動するという分析を提案している。この考え方には従えば、実際には there とその痕跡によって A 連鎖が形成されるだけで関連要素は関係ないのであるが、痕跡と関連要素が一つの構成素を形成するので間接的に there と関連要素が A 連鎖を形成しているように見えることになり上記の性質は容易に説明できる。大変巧妙な説明だと思われるが、しかし詳細に考えてみると問題がないわけではない。以下の節ではその問題のいくつかを検討する。

## 2.

最初に「there と関連要素が一つの構成素を形成している」という Witkoś (2004) の主張の根幹をなすアイディアについて検討してみたい。このアイディア自体は著者自身も指摘しているように新しいものではなく、Zwart (2002) や Kayne (2002) において別の構造に対して同様の分析が行われている。それ故それなりに根拠のあるものであるが、there と関連要素が形成する構成素の内部構造に関して問題がある。詳しい構造が具体的に示されることではなく、いくつかの箇所 (たとえば p.182, l.6) で there はその構成素 (本文では DP であるとされている) の主要部または指定部にあると述べられているだけである。主要部なのか指定部なのか決まっていない (あるいは、どちらでもよい) というのは問題であると思うが、そもそも主要部であるという考えは不可能であろう。著者自身も注 20 で述べているように、there は主語位置へ A 移動するのであるから主要部ではないことは明らかである。仮に there が単独で存在していれば主要部であり且つ最大範疇でもあると考えられるのでそのような移動は可能であろう。しかし著者の考えでは there は補部を持つ DP の主要部になっているのでそれに該当しない。従つ

て there は DP の指定部にあることになる。なお、注 20においては there を接語 (clitic) と分析する解決案が示されている。接語が一般に主要部であり且つ最大範疇でもあるとされていることを利用した解決案である。接語が遊離して繰り上がって行くのは問題になるかもしれない。そのような現象が英語においてはなさそうだからである。ただし、ロマンス諸語に見られる clitic climbing のような現象が存在するので、あながち間違いとは言い切れないであろう。以上より予想される内部構造は (3)-(4) のようになろう。



これらの構造を想定するといつかの点において著者の主張がうまくいかないようと思える。まず there と関連要素の一一致の仕方が問題になる。著者は there 構文に見られる動詞と関連要素の一一致について、(3) もしくは (4) の段階で there と関連要素が一致した後 there が主語位置 (TP の指定部) へ移動し、そこで T と一致するとしている。次の例 (p.178) のような動詞と関連要素の一一致の現象については、there は関連要素と必ずしも一致する必要がないと想定し、一致しない場合には動詞は不履行形式 (default form)、即ち三人称単数形に一致した形式で表されるとしている。

(5) (?) There seems to be men in the garden.

(6) There is a dog and a cat on the roof.

(4) に関して *there* と関連要素を一致させるのは不可能だと思われる。どこかの言語の文法に見られる現象なのかもしれないが、寡聞にして知らない。

(3) については、例えばフランス語の「所有形容詞+名詞」の例 (*mon père*、*ma mère* など) が示唆されている (p.183, II.5-7) が、これは決定的な証拠とは言えないと思われる。確かに *mon* や *ma* は DP の指定部にあると考えられるが、もともとは補部の NP の指定部にあったと考えるのが妥当だからである。すなわち、もともと補部の NP 内で N と一致していた所有形容詞が DP の指定部へ繰り上がることによって正しい形式で実現すると考えられるからである。補部の NP 内で *there* が主要部の N と一致していたとは到底考えられないので指定部と補部の一一致はおそらく不可能であると考えられる。

また定性効果に関する説明もうまくいっていないようである。(3) と (4)においては *there* が移動しても相変わらず DP が残ることになる。著者は DP が消失して bare NP が残り、それは indefinite であるので *there* 構文において定性効果が生じるといったようなことを示唆している (p.182, II.5-10) がそれは無理であろう。そもそも英語では bare NP が独立して統語構造内に存在できないと考えるのが普通だからである。また *there* が接語 (clitic) である場合に *there* が移動した後に DP が残らないようにするためにには、(4) のような構造ではなく独立して存在する NP の主要部 N に *there* が付加しているとしか考えられないが、これもあり得ないと思われる。上記と同様英語は bare NP が独立して存在しないタイプの言語であるから、やはり *there* は関連要素を内部に含んでいる DP に付加しているとするべきで、最初から bare NP として独立して存在する関連要素に付加しているとは考えられない。いずれにせよ *there* が移動した後には DP が残りその DP の主要部 D は indefinite D ということになる。すなわち、*people*, *students* などの DP と同じ D を持つと考えられる。そうなると「*there* が DP を形成するのは indefinite DP に併合する場合に限る」と言っていることと同じになり、結局は *there* は indefinite DP にしか併合しないので定性効果が出てくるという至極当た

り前の説明になってしまう。これでは理由の先送りで、なぜ there は indefinite DP にしか併合しないのかが全く説明されていないわけであるから結局定性効果は説明されていないのと同じことである。

主語位置へは there だけが移動し、「there + 関連要素」で構成された DP 全体が移動するのが許されないことに対する説明にも問題があるようと思われる。著者は there と DP ともに格を付与／照合されなければならないとしている (p.181, 1.19, p.186, II.6-7)。DP 全体が主語位置へ移動してしまうと there に対する格付与／照合ができなくなり非文が派生されるので there だけが主語位置へ移動するという理屈である。果たして there に格が必要なのかという根本的な問題はさておき、この場合 there の格付与／照合は問題ない。しかし DP の格はどのように付与／照合するのかについては問題があると思われる。著者は動詞が be である場合の there 構文しか視界に入っていないようで、DP は be の指定部において格付与／照合されるとしている (p.186, II.6-7)。どういうシステムで be が指定部の要素に格を付与する（あるいはその格を照合する）のか皆目見当がつかないが、無事に格付与／照合が行われた場合 DP は be に先行することになる。しかし最終的に be は T 位置へ繰り上るので再び DP に先行することになり正しい語順が出てくる。しかし (7) のような be 以外の動詞を用いた there 構文についてはどうであろうか。

- (7) In the 1960s there appeared a new type of car. (ジーニアス英和)

仮に派生の仕方は be を用いた場合と同様に行われるとすると、there と関連要素で形成された DP は動詞 appear の指定部へ移動しそこで格を付与／照合され、その後 there だけが主語位置へ移動することになる。DP を appear の指定部へ移動しそこで格を付与／照合するというのはかなり疑わしい操作であり、これだけでもこのような派生方法は不可能だと思われるが、仮にこれが可能だとしても表層の語順が説明できないという大きな問題が生じる。

すなわち、現代英語では一般動詞 appear は be とは違って移動することはないので予想される語順は「there + 関連要素 + appear」となり（7）の語順にはならない。さらに be を用いた場合でも問題がないわけではない。法助動詞が用いられていると法助動詞が T 位置に入ることになり be は元位置に留まつたままになる。そうなると「there + 法助動詞 + 関連要素 + be + …」という語順になり現代英語では許容されない語順が出てくることになる。その問題を解決するためには be をさらに上位の位置へ移動する必要があるが、幸いにも VP (あるいは vP) よりも上位に位置する機能範疇がいくつか提案されているのでそれらを利用できるであろう。しかし（7）のような場合はそれも不可能であるので、あとは部分格 (partitive case) に頼るしかないと思われるが、著者は注 21 において部分格は用いないとしているのでやはり関連要素を含む DP に対する格付与／照合は大きな問題であると思われる。

## 3.

著者は there と関連要素が一つの構成素を形成するという提案に関連して、次のような想定をしている (p.178)。

- (8) Expletives cannot check theta roles.
- (9) Derivations with undischarged θ-roles do not converge.
- (10) An expression discharges a theta role by merging into a theta position.
- (11) Associates never move.

この節では (11) について検討する。この想定は Chomsky (1986) で提案されている「LF における関連要素の移動」は存在しないということを表し

たものである。しかし前節でみたように (be を用いた there 構文の場合) there と関連要素が形成する構成素 DP は格付与／照合のために be の指定部に移動するとされている。これは実質的に関連要素が移動していることになるが、実際には関連要素が含まれる構成素が移動しているだけで関連要素そのものは移動していないとして (11) に対する反例ではないと主張できるかもしれない。しかし、there と関連要素が形成する構成素の内部構造が前節の (3) もしくは (4) あるとすれば、そもそも (11) はナンセンスであろう。関連要素そのものは NP でしかないので初めから移動は不可能であるからである。仮に (11) の「関連要素」を「there と関連要素が形成する構成素 DP」と読み替えたとしても be を用いた there 構文においてその DP の格付与／照合が移動を伴うので (11) の反例になってしまう。そのような移動による格付与／照合を廃止し何か別の格付与／照合を提案したとしても次の (12) のような中英語の there 構文が説明できないであろう。

- (12) ¶are sall na straunger com before him for to ask him . . .  
there shall no stranger come before him for to ask him  
(*Mandeville's Travels* Chap.6. p.20. l.19)

この例においては明らかに関連要素（を含む DP）が移動している。不定詞 com ('come') は非対格動詞であるので意味上の主語 na straunger ('no stranger') はもともと com の後ろにあったと考えられるからである。いずれにしても (11) は単純化し過ぎているようであるので、より精緻な記述が望まれる。

#### 4.

現代英語において他動詞虚辞構文 (transitive expletive construction) が許容されないことを説明するために、著者は現代英語では目的語が義務的に vP

の指定部の位置へ移動すると想定している（p.185, l.11）。この想定のもとで他動詞虚辞構文を派生すると（13）のようになる。

- (13)  $[_{\text{TP}} \text{there} T^0 [_{\text{vP}} \text{Object} [_{\text{vP}} [_{\text{DP}} \text{there} \text{NP}] \text{v} [\text{V} \Theta\text{bject}]]]]$

この派生では there が前置された目的語を越えて移動しているので明らかに Minimal Link Condition (MLC) の違反である。すなわち、探査子 (probe)  $T^0$  から見て目的語と  $[_{\text{DP}} \text{there} \text{NP}]$  は等距離にあるので DP 全体を移動するのは MLC の違反にはならないが、目的語と DP 内の there は等距離ではなく there のほうが遠い位置にあるので（13）で行われている there の移動は MLC の違反になる。したがって現代英語において他動詞虚辞構文は派生できないので現代英語には他動詞虚辞構文は存在しない。以上が著者の主張である。確かに他動詞虚辞構文については鮮やかに説明できているようであるが、非常に初步的なそして非常に大きな問題が残ると考えられる。現代英語では目的語が義務的に vP の指定部の位置へ移動すると想定してしまうと、通常の他動詞文がすべて「主語 + 目的語 + 動詞」の語順になってしまうからである。先に述べたように現代英語では一般動詞は vP 内から移動しないので目的語を前置すればどうしてもそのような語順になってしまう。この問題を解消するためには PF において語順を修正するという「裏技的な」操作を行うか、2 節で述べたように（be 動詞のみならず）一般動詞も vP よりも上位に存在する何らかの機能範疇へ移動すると仮定するしかないと思うが、その論証はかなり難しいように思われる。

## 5.

Witkoś (2004) において提案されている there 構文の分析は斬新で、従来の分析では解決できなかった問題を解決する方策を提供しているという点で興味深いものであると思われるが、斬新である分だけ問題点もいくつか内包

Witkoś (2004)において提案されている there 構文の分析について

している。本稿ではそれらの問題点のうち主に目についたものを三つ取り上げて検討した。詳しく見ればさらにもっと問題点が出てくるかもしれない。基本的に興味深いアイディアであるのでそれらの問題点が克服されてより興味深いものになることを望む。

#### 参考文献

- Chomsky, N. 1986. *The Minimalist Program*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Chomsky, N. 1999. "Derivation by Phase," *MIT Occasional Papers in Linguistics 18*.
- Chomsky, N. 2000. "Minimalist Inquiries : the Framework," In Martin, R., D. Michaels and J. Uriagereka (eds.). 89-155.
- Epstein, S. D. and D. Seeley (eds.). 2002. *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*. Oxford : Blackwell.
- Kayne, R. 2002. "Pronouns and Their Antecedents," In Epstein, S. D. and D. Seeley (eds.). 133-183.
- 小西友七・南出康世(編). 2006. 『ジーニアス英和辞典(第4版)』東京：大修館書店.
- Martin, R, D. Michaels, and J. Uriagereka, (eds.) 2000. *Step by Step : Essays in Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. Cambridge, MA : MIT Press.
- Witkoś, J. 2004. "Raising Expletives," *Poznań Studies in Contemporary Linguistics 39*.
- Zwart, J. W. 2002. "Issues Relating to a Derivational Theory of Binding," In Epstein, S. D. and D. Seeley (eds.). 269-304.